

声の病気で「一色の法」と呼ばれる甲状腺軟骨形成術を開発したことで世界的に知られる中京区の一色クリニック院長、一色信彦さん(76)=京都大名誉教授=が著書「声の不思議」(中山書店)を出版した。半世紀のキャリアがあり、1500人以上を診てきた。一色さんは「とにかく声は不思議で謎が多い。本が、声に興味を持つきっかけになれば」と話している。

京大医学部を1954年に卒業。医学部付属病院にいた77年、局所麻酔による手術方法を発表した。従来の治療は声帯を直接施したが、一色さんが開発したのは声帯を支える甲状腺の位置を調節する方法だった。例えば、声帯がいれんして声が詰まつたり、

中京・一色クリニック 一色 信彦院長

震えたりする病気がある。けいれんを止める治療法はまだないが、声帯を支える甲状腺を広げれば、声が出るようになる。局所麻酔のため、声を出させながら手術す

ることができる。声帯に触れる甲狀軟骨の位置を調節する方法だつた。従来の治療は声帯を支える甲狀軟骨の位置を調節する方法だつた。

例えは、声帯がいれんして声が詰まつたり、

「興味持つきつかけに」

「一色の法」 世界で導入

声出す手術

男の声から 女の声にも

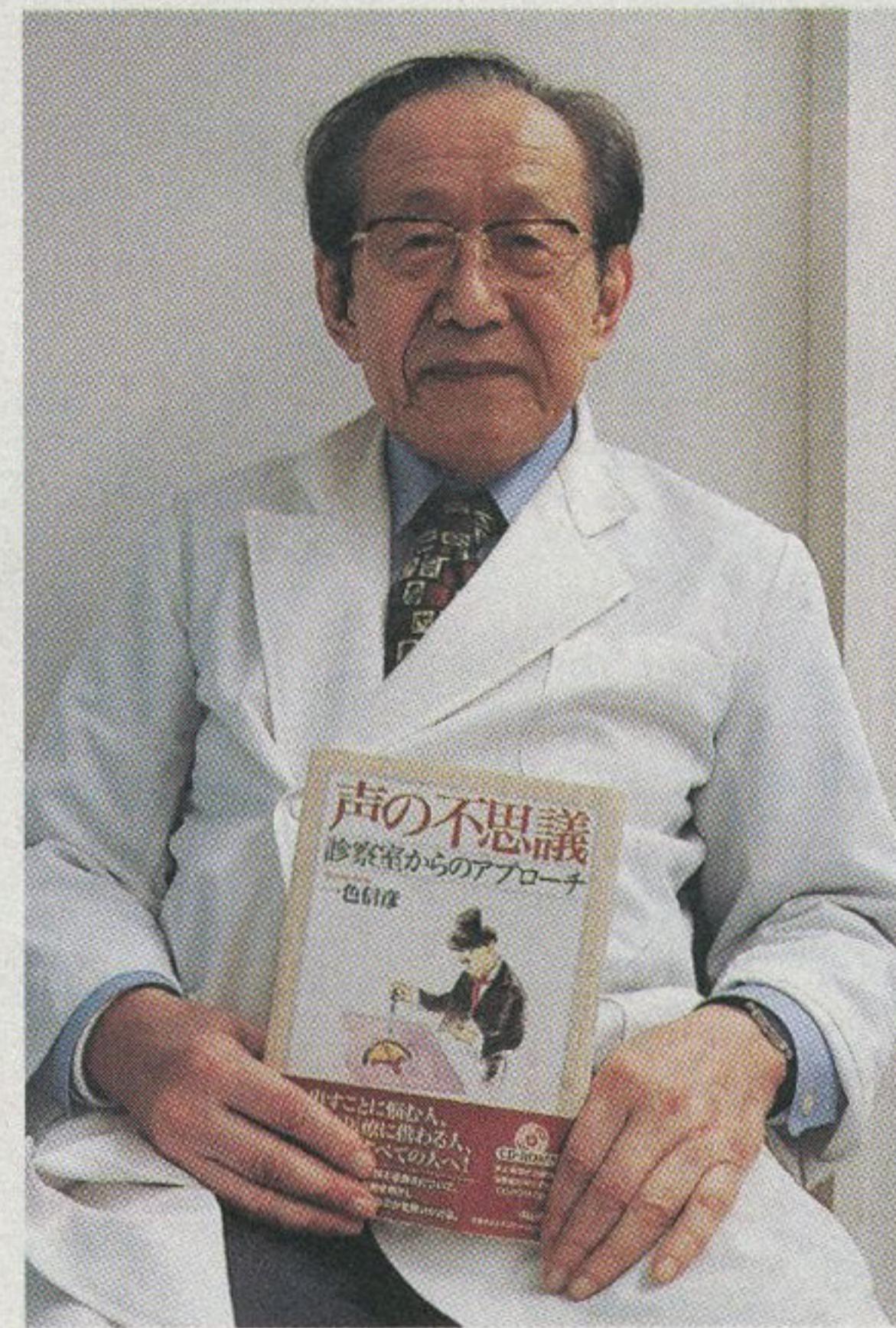
10年近くうまく発声ができる。そのため、周囲から奇異のまなざしを向けられたと涙ながらに訴

今春、韓国人の世界的オペラ歌手ベー・チエチヨルさんが訪れた。ベーさんは甲状腺がんで手術を受けて声帯をつかさどる神経を切り、空気が漏

れるかもしれないが、復活を信じている」と話す。

著書「声の不思議」は、声の病気への質問、治療法の変遷などを紹介。付録のCDには、性同一性障害の患者の術前、術後の声などが録音されている。問い合わせは中山書店(03・3813・1100)へ。

「声の不思議」 権威が本出版



著書「声の不思議」を出版した一色信彦さん=中京区の一色クリニックで

最近では性同一性障害の患者も多く訪れる。女性への性別適合(性転換)手術をしても、低い声に違和感を覚える人がいる。声帯の間隔を狭く

手術では、声帯の位置を楽器の調律のように1ミリ単位で変えていった。「声を出してみて」「これじゃ、ダメ」。何度も調整を繰り返し、4時間に及んだ手術の最後、ベーさんが賛美歌を歌った。透き通る美しい声に、手術室は静まりかえった。輪島さんは「リハビリに時間がかかるかもしれないが、復活を信じている」と話す。

れるほど声しか出なくなつた。支援者の音楽プロデューサー輪島東太郎さんらがドイツや英国で

声がスムーズに出るようになると、笑顔に変わつた。「声は自己表現の一つ。しゃべれないということは想像以上につらいものです」と一色さんは話す。

医師を探した際、「マエストロ(巨匠)」として名が挙がったのが一色さんだつた。